

## [研究論文]

ジャクエツの保育絵本『メリーランド』（1951-56）：  
創刊の背景と概要

小松 恭代

1940年代後半から1950年代には保育絵本の復刊や創刊が相次いだ。保育絵本とは主に出版会社からの直販方式によって幼稚園や保育園を通じて個々の家庭に配本され、定期購読された月刊絵本の総称である（井岡 185）。1946年に『キンダーブック』（フレーベル館）が復刊<sup>1)</sup>し、『ひかりのくに』（昭和出版）が創刊されたのに続いて、1948年『プレイメート』（プレイメート刊行協会）、『あそび』（児童福祉会）、『幼年えほん』（新生閣）、1949年『チャイルドブック』（チャイルド本社）、1951年『メリーランド』（若越）、1952年『よいこのくに』（学習研究社）、『私の幼稚園』（博英社）、1955年『こどものせかい』（至光社）、1956年『こどものとも』（福音館書店）と次々に創刊された。多数の保育絵本の刊行は1950年代以降に幼稚園や保育園が整備拡張されたことと関係がある（井岡 185）。

ここで注目したいのは、福井県敦賀市に本社がある（株）ジャクエツ（旧社名は若越、以後ジャクエツと表記）によって刊行されていた『メリーランド』である。この会社の創立は、創業者の徳本達雄が運営する幼稚園で必要になった教材づくりがきっかけとなっており、保育絵本の出版も教育課程に基づいた幼稚園での活用をめざして進められたと推察される。1951年にジャクエツはこの絵本の刊行のために編集室を東京に開設しており、クレヨンなどの教材の製造・販売から保育絵本という新しい分野に事業を拡張していく熱意と意気込みが感じられるが、約5年後の1956年3月号をもって廃刊している。

筆者がこの保育絵本を知ったのは、福井県立美術館で開催された展覧会「今、あなたにつたえたい ミリオンセラー・ロングセラーの絵本たち」（2022年9月30日～11月6日）において、1952年12月号に掲載された林義雄の「まっちうりのおんなのこ」の原画を見た時だった。そこに『メリーランド』の同号も展示されており、1951年という終戦からそれほど経っていない時期に、戦災を体験した敦賀にある会社が保育絵本を全国に向けて刊行していたことに衝撃を受けた。『メリーランド』とはどのような絵本だったのだろうか、ジャクエツはどのような経緯で、何を目指して創刊したのか、どのような画家たちがかかわったのだろうかという疑問が湧いた。

受付日 2024.5.8

受理日 2024.6.13

所 属 学術教養センター

しかし、刊行期間が比較的短かったことが理由なのかもしれないが、『メリーランド』は「『月刊保育絵本』にみるいわさきちひろの母子像の変遷」(宮下 2015)の中で、戦後に刊行された保育絵本のひとつとして名前が挙げられているだけで、この絵本を主軸に据えた研究はまだないようであった。

戦後直後に創刊された保育絵本に関しては、『こどものせかい』の特徴を主な画家の作品分析から考察した論考(柴村 2002)、『チャイルドブック』の内容を「地域性」の観点から検証した研究(松山 2013)、『ひかりのくに』の別冊付録の分析から保育絵本に対する母親の役割を考察した論考(井岡 2021)などがある。井岡は、保育絵本の研究は「緒に就いたばかり」(187)と述べている。『メリーランド』は福井県敦賀市という人口約3万人<sup>2)</sup>の地方の町にある会社によって創刊されており、このことは幼児教育を含む戦後の教育改革への期待が地方レベルでも高まっていたことを示唆する。当時、ジャクエツは幼稚園や保育園で必要とされた教材を製造・販売しており、この保育絵本も幼児教育の向上のために現場でのより良い活用をめざして制作されたと考えられ、当時の幼稚教育を知る上でもこの絵本の研究は重要であるだろう。本稿では、『メリーランド』研究の足がかりとして、国立国会図書館国際子ども図書館や国際児童文学館で収集した『メリーランド』の複写とジャクエツの関係者からの聞き取りや同社の記念誌の記述をもとに、この保育絵本の創刊の背景や概要を明らかにしてみたい。

## 1. ジャクエツと保育絵本

ジャクエツが『メリーランド』を創刊することになった背景を見ていきたい。『創業100周年記念誌』(以後『記念誌』)によると、創業者の徳本達雄(1893-1967)は敦賀の浄土真宗の良覚寺に生まれ、東洋大学に進んだ。寺院の中には特に江戸時代に寺子屋として地域住民の子弟の教育にかかわっていたものがあるが、良覚寺も「檀家子弟のしつけの場」(『記念誌』26)としての役割を担っていたようだ。徳本は大学での学びや人々との交流を通じて見聞を広め、「幼児教育の重要性を痛感」(『記念誌』26)するようになり、1912年、卒業後敦賀に帰郷すると早速幼稚園の開設をめざした。当時敦賀に幼稚園はなく、福井県全体でも4校しかなかった<sup>3)</sup>。徳本は有識者や資産家に幼児教育の必要性を訴える努力を続けて支援を集め、1916年9月に早翠幼稚園を開園する。定員80名、2組編成で2年保育の幼稚園であった。敦賀には前年に開園した敦賀幼稚園があり、早翠幼稚園はその地で2番目の幼稚園となった。『福井県統計年鑑』によると、1917年度の早翠幼稚園の在籍数は102名、1919年度は109名、1925年度は127名である。一方、福井県内の幼稚園数は1925年には22校、1935年には33校にまで増えている。1926年に幼稚園令が公布され、「教育制度上における幼稚園の地位が確立し、その整備が一層図られた」(『幼稚園教育百年史』9)こともあり、幼児教育の重要性が人々の間で認識され、浸透していったことが幼稚園数の増加からうかがえる。

徳本は福井県に提出した幼稚園設置の申請理由を、「殊に児童ノ幼年期ハ心身虚弱ニシテ周囲ノ事情ニ感染シ易キ故教養一タビソノ道ヲ誤ランカ天稟ノ美質ヲ傷ヒ自然ノ發育ヲ碍クル憂ナシトセズ」（『記念誌』27）と書いている。子供は周囲の影響を受けやすく、子供の「美質」の健全な発達には正しい教育が必要であると主張しており、幼児教育への並々な情熱が感じられる。当然のことながら、教育目標や指導方針も考えていたはずである。しかし、いざ幼稚園の運営を始めてみると、徳本は自分のめざす教育の実施に必要な教材が足りないという問題に直面したようだ。思うような教育ができないことに悩み続けて、この問題の解決には自分で教材を作るほかないという結論に達し、開園の翌年1917年に、自身の寺院の境内で教材製造を始める。手伝いを雇って、「和紙を染めたいろがみや貼紙、手技品」（『記念誌』32）を作り出したが、教材開発が進むにつれて近隣の幼稚園で評判となり、販売依頼が来るようになった。このことがきっかけとなり、同年ジャクエツ（当時は若越）が創業された。

教材の開発・製造・販売が軌道に乗り、教材販売は順調に伸びていった。特に福井県の上質の越前和紙から作られるいろがみと独自に開発したクレヨンが人気商品となり、県内外の幼稚園や保育園から注文が殺到したようだ。1899年の幼稚園保育及設備規程では、保育内容は「遊戯、唱歌、談話、手技」の四項目で指導上の留意点等も事細かに指示されていた。1926年の幼稚園令施行規則では留意点に関する記述が消え、内容も「遊戯、唱歌、観察、談話、手技等」となって「幼稚園ごとにかなり自由度の高い保育が可能」（谷脇 4）となった。いずれの規程においても「手技」は重要な保育項目として含まれており、保育の現場では適切な教材が求められていたことが想像される。ジャクエツは手技研究部で「新教材を次々に企画製造」（『記念誌』32）していったが、早翠幼稚園で実際に教材を活用する子供たちを観察しながら教材の開発や改良ができたことはジャクエツの大きな強みであっただろう。子供たちを見守り指導する保育者たちの意見も取り入れながら、手技研究部は新しい教材を製作していったと推察される。

第二次世界大戦中、敦賀は米軍の爆撃にあい、早翠幼稚園もジャクエツの工場もすべてが灰燼に帰した。しかし、終戦後すぐに復興に取り組み、1949年にジャクエツは法人組織として再スタートを切っている。GHQは日本の民主化にとって民主主義教育が重要であるとの認識から直ちに教育制度の改革を進め、1947年に教育基本法の制定、1948年に保育要領の刊行を実施した。新しい教育制度が確立されて民主主義の明日を担う子供たちの教育への関心が社会に高まる中で、早翠幼稚園は1952年に再開し、その前年の1951年4月に『メリーランド』が創刊された。東京に編集室を開設し、敦賀出身で東京美術学校の彫刻科を卒業した加賀山敬二が編集を担当した。当時活躍していた童画家や児童文学者たちが多数制作にかかわっており、保育絵本出版への意欲と「志の高さ」（『記念誌』41）が感じられる。創刊号の別冊付録である保育者や保護者向けの冊子、『保育テキストMERRY-LAND』（以後『保育テキスト』）の「編集の窓」には、「永い準備期を人知れず過して……いよいよ創刊号を送り出す」ことになったと書かれ

ており、この言葉には徳本の心情があらわれているだろう。1919年4月4日の大阪朝日新聞の記事「早翠幼稚園の発展」には、「預つて居るお子様方の健康に注意して如何にせば良いお子さんを造る事が出来るかと云うことと感情教育といふ事に専ら重きを置いて居ります」と書かれている。徳本にとって、保護者から預かった子供たちを「良いお子さん」にする「感情教育」を行うためには、いろがみや画帳、クレヨン等の教材開発と並んで絵本の刊行が必要だったのである。また徳本は、児童文学者及び口演童話家として知られる久留島武彦の影響を受けていた<sup>4)</sup>ようであり、子供にお話を語ったり、読み聞かせをしたりするためにも絵本の制作に大きな関心があったと思われる。

ここまで、徳本が幼稚園創設から教材会社設立を経て『メリーランド』を創刊するまでの経緯や背景を見てきた。次節では『メリーランド』はどのような保育絵本であったのかを考えたい。

## 2.『メリーランド』創刊の意図

『メリーランド』の内容を分析する前に、どのような意図でこの絵本が創刊されたのかを見ていきたい。『保育絵本メリーランド』が正式名称であり、保育絵本、つまり、直販方式による販売で幼稚園や保育園を通じて子供に届けられる月刊絵本であることが明示されている。1951年4月の創刊号の別冊付録『保育テキスト』の「発刊にあたって」には、次のように書かれている。ここには徳本の考えが反映されているだろう。

メリーランドは……御家庭と幼稚園や保育所との間を、仲よく手をつなぎ合って往つたり来たりしたいと思っています。そうして、往つたり来たりしているうちに、お子さまがたの心の中で、御家庭と幼稚園や保育所との関係がいよいよ密接なものとなり、お家庭にあるときも、幼稚園や保育所にあるときも、いつもお母さまの眼と先生の眼が一緒になって、常にじぶんたちをあたたくみまもっていて下さるというような、安心と信頼の楽しく幸福な状態を、お子さまがたの心に育んで行きたい、今後本誌で取あつかうて行く色々な事象を通じて、そういう風な役割をまず果して行きたい、と思っています。

先述の新聞記事によると、徳本は子供の感情教育に重きを置いており、絵本は子供の豊かな感情を育むのに有用である。しかしそれだけではなく、ここでは子供にとって保育者や保護者（「お母さま」）から愛され、見守られていると感じられることが大切であり、「安心と信頼の楽しく幸福な状態」を子供の心に育てるために『メリーランド』を創刊すると述べている。子供が絵本を保育者や保護者に読んでもらい、大人と楽しい時間を共有できることほど子供の心が安定することはない（阿部 160）。また徳本は、子供を中心に保育者と保護者をつなぐ役割も『メリーランド』が担うようにしたいとも言っている。『メリーランド』は活用を通じて子供、保育者、

保護者の三者を愛と信頼でつなぎ、子供に安定した豊かな心を育むことをめざして創刊されたと考えることができる。

豊かな心の育成のために、徳本は『メリーランド』の活用法をどのように考えていたのだろうか。『保育テキスト』には、『メリーランド』は「先生がたの保育上の材料の一つとして日常具体的に役立てて頂くことが出来、お家庭にあっては、誌上幼稚園として、おかあさまがたの手助けを果たすこと出来る」と書かれている。保育絵本は幼稚園や保育園を仲立ちとして子供とその保護者に届けられる点に特徴があり、出版社は絵本の制作において、幼稚園や保育園だけではなく、子供が持ち帰る家庭での活用を想定する必要がある（井岡 186）。徳本は園長としての経験からこのことをよく理解し、幼稚園や保育園と家庭の両方で活用できる保育絵本づくりをめざしていたことがわかる。1948年に刊行された「保育要領」は幼稚園や保育園、家庭における幼児教育のあり方を示しており、「見学 リズム 休息 自由遊び 音楽 お話 絵画 製作 自然観察 ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居 健康保育 年中行事」の12項目の保育内容が定められている。徳本はこの「保育要領」にそって、『メリーランド』を幼稚園や保育園と家庭が一貫した保育を行うためのひとつの手段として考えていたと思われる。『メリーランド』が教材として国の定めた保育内容の実施に有用であるように制作されるのは当然であるが、興味深いのはそれが家庭における「誌上幼稚園」としても役立つと徳本が述べていることである。家庭で子供に読んでやるだけではなく、現場の保育者のような教育的役割を果たすことを母親に求めていたとも解釈できる。徳本は安定した豊かな心を持つ子供の育成を目的に『メリーランド』を創刊したが、その目的の達成のために幼稚園や保育園だけではなく、家庭においても教育的に有用な教材となることをめざしていたと言えるだろう。

### 3.『メリーランド』の内容

ここでは、『メリーランド』の具体的内容を見ていきたい。創刊号／4月号の構成は下記の通りである。

タイトル／テーマ	画	文	頁
	黒崎 義介		(表紙)
おててつないで	黒崎 義介	高木 文乃	2-3
あたらしいともだち	林 義雄	高木 文乃	4-5
やさしいせんせい	黒崎 義介	高木 文乃	6-7
みんなのおにわ	沢井一三郎	高木 文乃	8-9
はなわのおどり	堀 文子	與田 準一 詩	10-11
よいこのよいこのあかめちゃん	富永 秀夫	柴野 民三	12-13
こぶたのともだち	武井 武雄	浜田 廣介	14-15
よいこのいちにち	鈴木未央子		(裏表紙)



表紙には、たくさんの桜の花びらを背景に新しく入園した喜びあふれる男女の子供が描かれている（資料1）。創刊号は表紙を合わせて16頁で構成され、見開き画面ごとにタイトル／テーマと絵が異なっている。このうち「はなわのおどり」は童謡であり、子供たちが手をつないで踊っている絵に歌詞が添えられており、『保育テキスト』には楽譜（中田喜直 作曲）も掲載されている。また、「よいこのよいこのあかめちゃん」は見開き画面にひとつの絵が描かれている他のタイトル／テーマとは違い、4コマの絵と文で構成されている。「こぶたのともだち」は童話である。裏表紙の「よいこのいちにち」は8コマの園児の1日の生活場面を表す絵と、「なかよくあそびましょう」、「せんせいさようなら」のような文が8つ並び、「せんせいによんでいただいてえをあてましょう」という指示文があり、クイズのようになっている。



資料1 『メリーランド』創刊号／4月号(1951)の表紙

『保育テキスト』には、それぞれのタイトル／テーマごとに制作の動機や意図等の詳しい説明が掲載されている。たとえば、『メリーランド』の「やさしいせんせい」の画面では、ひとりの女性保育者と彼女にまわりつく数名の子供たち、それを笑顔で見守る男性の園長が描かれ、「みんなのおくちがたのしくひらくよ せんせい せんせい せんせい せんせい」の文が添えられている（資料2）。この絵に対し『保育テキスト』は、「先生を、子供たちの心に眞・善・美の理想として、而もそれは誠に身近にある楚々として清純な理想として表したいと思いました。……近よりがたい姿ではなく、あたたかく香やかで……という心持ちをこの画面で表しました」と解説している。「発刊にあたって」に述べられているように、「安心と信頼の楽しく幸福な状態」を子供に与えられる保育者の理想をこの絵で表現していると見ることができる。続けて、「（無理を言って）先生を困らせないこと。だけど先生もやっぱりお父さまやお母さま

のように、みんなを大変可愛がつて下さいます。……おそれないで、安心して先生に親しみましょう」と書いている。保育者は子供にとって安心できる存在であることを伝えているが、これは保護者というより子供に向けた言葉であり、母親が子供にこの部分を声に出して読むことが期待されている。母親が子供に読んでやることによって、母親が保育者に信頼を寄せていることを子供は理解し、書かれている内容も確実に子供に伝わるだろう。徳本を含め編集者たちが、保育者、子供、保護者／母親の間の信頼関係の構築を重要視していたことがここでもうかがえる。



資料2 「やさしいせんせい」『メリーランド』創刊号／4月号(1951) 8-9 頁

「よいこのよいこのあかめちゃん」はウサギを女の子に擬人化して描かれている。「よいこ」を重ねたタイトルからもわかるようにしつけの要素が強い。『保育テキスト』にも、「あかめちゃん」には「幼児のしつけを物語」に入れたと書かれている。最初のコマの文は、「よいこのよいこのあかめちゃん おねぼうなんかだいきらい おこされなくてもめをさまし はをよくみがいて かおあらひ ぶるぶるぶるといいあさね」である。「あかめちゃん」は朝の支度だけではなく、何でもしっかり行うことのできる「よいこ」として表象されている。どの場面もリズムカルで調子のよい文で書かれており、何度も読んでやることで、子供が楽しみながら正しい行いや基本的な生活習慣を自然に理解できるように構成されている。5月号では「あかめちゃんのたんじょうび」、6月号では「あかめちゃんのおみまい」というお腹をこわした友達

を見舞う物語、7月号では汽車の中でのマナーを書き入れた「きしゃにのったあかめちゃん」となっており、「あかめちゃん」は「日常のしつけ」（『保育テキスト』）を織り込んだ物語としてシリーズ化されていたようである。永田は『絵本観・玩具観の変遷』において、子供はしつけの対象であるという根強い児童観が戦中戦後を通じて存在し、「してはいけないこと、しなければならぬことを教える」（183）絵本が戦後の一定期間に多く見られたと述べているが、このことは『メリーランド』にも当てはまる。

『保育テキスト』は『メリーランド』を教材として活用する際の手引書でもあり、いつまで別冊付録としてつけられていたのかは不明であるが、各タイトル／テーマの解説や子供への与え方が直接その頁の欄外に記載されている号もある。たとえば、1951年6月号の「にじ」では、虹とそれを見ている二人の子供の絵に、「梅雨時には、よく虹が出ます。空中に夢の様にかかったきれいな虹。虹はどんな色をしていますか。またどうして出来るのでしょうか」という質問形式の文言がつけられている。1953年7月号では、5つのタイトル／テーマの各見開き画面の欄外にそれぞれ解説と活用法が小さな文字でびっしり書き入れられている。たとえば「ゆうだち」では、夕立の説明のあとに「幼児の知識として、夕立の前徴、急に広がる黒雲、激しい突風など覚え、一刻も早く家へ戻るように。又、大木、高い建物の下をさけて雨やどりすることなども、お教えください」と教材としての活用法が指示されている。また同号では、裏表紙にさらに詳細なテーマごとの設定意図や動機、絵の解説が加えられている。

1953年12月号では、各テーマの欄外に「もんだい」として絵や内容に関する3～4の質問が書かれている。たとえば「おくりもの」（資料3）に関する問題は、「1. おかあさんは、なに



資料3 「おくりもの」『メリーランド』12月号(1953) 2-3頁



をしていますか。2. おかあさんのそばにある、紙や、ひもは、なににつかうものですか。3. おにんぎょうさんを送るゆうびんは、なんといいですか」である。1954年1月号の「おとしだま」は猿の子供たちがお年玉としてプレゼントをもらう物語であるが、「お正月の楽しさを話しあうように導いてください」と教材としての活用法が示され、「テスト」として猿の子供の人数やお父さんがお年玉に買ったもの等に関する問題が与えられている。テーマの解説は保育者や母親の参考になるだろうが、絵や内容に関する問題の提示は子供がテーマの内容を理解できているかどうかの確認を保育者や母親に求めていることを示唆する。このような子供の理解度を試す問題を含む活用法の提示は感情教育よりも知育に重点を置いているようであり、『メリーランド』創刊号で示した「安心と信頼の楽しく幸福な状態」を子供の心に育むという刊行の意図とは少しずれているように感じられる。

『メリーランド』の内容は、1948年の「保育要領」に定められた保育内容、「見学 リズム 休息 自由遊び 音楽 お話 絵画 製作 自然観察 ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居 健康保育 年中行事」にそって構成されている。たとえば、1954年1月号の「くれよんをこしらえるこうば」はクレヨン工場の内部を描いた絵とともに欄外に、「1. いろのこなをはかってとりだす。2. いろのこなをよくかきまぜる。……6. できあがったくれよんにかみをまいてはこにいれる」の説明書きがある。クレヨンは実際ジャクエツが製造・販売する人気教材であった。このクレヨンの頁は「保育要領」の「見学」に該当し、絵を見ながら説明を読んでもらうことで、あたかもクレヨン工場を見学したように子供が感じる教育的効果がある。また、1955年7月号の朝顔の花やつぼみ、葉が写実的に描かれている「あさがお」や、オニヤンマと子供が会話している「とんぼのとんちゃん」は、夏の身近な花や昆虫に子供が親しむ「自然観察」の教材になる。1953年11月号の「おかあさんごっこ」は「ごっこ遊び」、1951年6月号の「こどもげき あめふれ、あめやめ」は「劇遊び」、同年11月号の「しんたいけんさ」や「びょうきにならないようにちゅうしゃするよいこども」は「健康保育」に該当する。「年中行事」については、「おひなさま」、「たなばたまつり」、「おつきみ」、「もちつき」などが毎年少しずつ絵や内容を変えながら掲載されている。子供は、日常生活で体験する季節ごとの行事を描いた絵を見ながら保育者や母親に文を読んでもらうことにより、日本の伝統的な行事を理解できる。

創刊号は表紙も合わせて16頁であるが、次号からは12頁となり、1954～56年は20頁へと増えている。見開き画面ごとにタイトル／テーマと絵が変わる構成が多いものの、同じ形式が続かないように工夫がなされている。たとえば、先述した「まっちうりのおんなのこ」の号は林義雄の絵による1冊の物語絵本になっているが、同じ物語絵本の形式であっても頁ごとに画家が異なる号もあり、絵のタッチや味わいの違いを子供に感じ取ってほしいという意図があるように感じられる。見開き頁の絵の中に文が書かれている形が多いが、文を絵の中に入れずに頁の下部や横に配置し、物語を聞きながら絵だけに集中できる構成にしているものもある（資料



資料4 「ふゆのおしたく」『メリーランド』11月号(1955)14-15頁

4)。童謡ばかりを集めた号や、「どうぶつ」をテーマに動物の絵と文のみで編集された号もある。コマ漫画の形式で物語を表現したものや、「おとぎすごろく おやゆびひめ」(1955年1月号)のように遊びを取り入れて、物語とすごろくの両方が楽しめる工夫もある。

『メリーランド』の魅力は、純真で愛らしい子供の表情や詳細な動植物を描いた絵にあると思われる。中には絵のみで文が全くない見開き画面もある。創刊号の『保育テキスト』の各テーマに関する解説には、「この絵を見ているうちに(そのことが)示唆されるようにしたいと思いました」、「たいへん面白い絵が出来上がりました」や、「そんな意味をもたせることがこの画面を作る動機でした」などと書かれており、徳本や編集者の加賀山にはそれぞれのタイトル／テーマごとの見開き画面に対する考えがあり、その考えやイメージに合うように画家との話し合いによってそれぞれの絵が制作されていたことがわかる。

『メリーランド』は1948年制定の「保育要領」に定められた保育内容にそって制作されており、見開き画面に描かれた絵と文、詩、物語を通じて子供たちが豊かな感情を身につけ、知識を広げられるように構成されている。また、別冊付録の『保育テキスト』や見開き画面の欄外に書かれた解説や絵に関する質問等によって、保育者や母親に教材としての活用法を提示している。『メリーランド』は子供の感情教育と幼稚園や保育園、及び家庭での教材という徳本の創刊の意図に沿った内容になっていると言えるだろう。次に『メリーランド』の制作に直接関わった編集者の加賀山や作家、画家について見ていきたい。

#### 4.『メリーランド』にかかわった人たち

先述したように、徳本は加賀山敬二（1905-83）を編集者として『メリーランド』の刊行を始めた。『知られざる福井の先人たち』では、加賀山は「近代彫刻家」（99）として経歴が紹介され、「ふるさと敦賀を離れて、貧困にも負けず、世俗にも迎合せず、己の彫刻一筋に貫いた人生」（101）を送ったと述べられている。『メリーランド』との関連を示す記述は何もないが、加賀山と子供向け雑誌や絵本とのかかわりは深い。

加賀山は1947年に、『犬のおまわりさん』の作詩者で詩人、童話作家として知られる佐藤義美や柴野民三等とともに『一・二年生の童話と童謡 こどもペン』を創刊している。国立国会図書館デジタルコレクションにある、一番古い同誌の1948年正月号の奥付には編集兼発行者として加賀山の名前が載っている。「あとがき」に加賀山は、「日本一のこどもごっしにしたいとへんしゅうぶのもの一どう、いっしょうけんめいです」と書いており、よい幼年児童雑誌を制作したいという意欲にあふれていたことがうかがえる。彫刻家の加賀山と童話作家の佐藤の親交がどのように始まったのかはわからないが、大分県竹田市にある佐藤義美記念館には加賀山が贈った「架空の階段を昇る男」という題の像が展示されており<sup>5)</sup>、二人は親しい友人であったことがわかる。また、加賀山は1948年に編集者として童画家の黒崎義介等とともに、絵本『なかよしさん プレゼントえほん』（ますみ書房）を出版しており、画家とも親しいつきあいがあったようだ。1956年の『メリーランド』廃刊後は『日本児童文学』の編集（1957年2・3月号等）に携わり、他の保育絵本の『チャイルドブック』（1958年1月号等）や『あそび』（1958年5月号等）、「たのしい名作童話」シリーズの『金のがちょう』（ポプラ社 1957年）などに絵を提供している。加賀山は東京美術学校出身の彫刻家であったが、同時に児童出版物の編集者や童画家としても活躍した人であった。

加賀山が『メリーランド』の編集者となった経緯を示す資料はない。徳本はもともと敦賀出身の加賀山と親交があり、加賀山には児童雑誌の編集経験に加えて佐藤や黒崎のような作家や画家とのネットワークがあることから、『メリーランド』の編集を依頼したのではないかと推察される。加賀山は実際、『メリーランド』においていくつかのテーマで文を書いており、『こどもペン』のあとがきからもわかるように、保育絵本制作に対しても情熱を持っていたと思われる。豊かな心を持つ子供の育成をめざして『メリーランド』を創刊した徳本にとって、加賀山は最適の編集者だったと言えるだろう。

『メリーランド』では佐藤や柴野、浜田廣介やまどみちお等、よく知られた詩人や童話作家が執筆しているが、ここではこの絵本で活躍した画家のみについて述べたい。上笙一郎が『日本の童画家たち』において「第二世代の童画家」（57）と呼ぶ、黒崎義介、林義雄、鈴木寿雄、茂田井武、木俣武等が『メリーランド』の常連画家である。「第一世代の童画家」（上 55）の中では、児童向け出版物の絵を「童画」と名付け、その地位を高めたことで知られる武井武

雄が多く絵を描いている。上は「大人に見てもらった方が意の存するところがわかる」（上 57）と考えていた第一世代の童画家とは異なり、第二世代の童画家は、「単純化はするけれども過度のデフォルメはせず、描写を克明にすることで画面の説明性を強め、窮極、美術的に訓練されていない子供たちにも容易に受け入れられる画風」（上 57）を大事にしたと述べている。先述したように徳本は子供の感情教育に重きを置いており、子供の心に訴える、わかりやすい絵を目指した第二世代の童画は『メリーランド』創刊の意図とも合致している。特に黒崎と林の絵はほとんど毎号掲載されており、この二人の童画家の絵が『メリーランド』の世界を形成していたと言ってもよいかもしれない。子供の視点に立って描かれた絵を通じて、物語を楽しむ、自分たちに身近なものだけではなく、新しい物事を学びながら子供たちは視野を広げていったと思われる。

『メリーランド』には女性の画家も参加している。堀文子や鈴木未央子（黒崎の弟子）、井江春代、いわさきひろ等であり、これらの画家は『メリーランド』に定期的に執筆している。堀は現在日本画家、鈴木や井江、いわさは絵本画家として知られている。『ちひろメモリアル』では、いわさが月刊絵本『こどものとも』1957年3月号で「ひとりのできるよ」という1冊の絵本を手がけ、これが「ちひろの絵本画家としての出発点」（12）になったと書かれている。なにを「出発点」と考えるかによるかもしれないが、いわさは1954年から『メリーランド』のレギュラーメンバーのように何度も絵を担当しており<sup>6)</sup>、この保育絵本も彼女にとって「絵本画家としての出発点」になったと考えることができるだろう。当時まだ若手の画家だった鈴木や井江ものちに絵本作家として成功しており、『メリーランド』は若手の女性の画家たちに執筆と成長の機会を与える場でもあったと言えるだろう。

これまで見てきたように、『メリーランド』は、終戦直後から絵本や幼年児童雑誌にかかわっていた加賀山が編集を担当し、1950年代に活躍した児童文学者や詩人、童話作家、および「第二世代の童画家」と呼ばれる著名な画家によって制作されている。内容は「保育要領」にそっているが、絵本を通じた心の豊かな子供の育成をめざして、幼稚園や保育園だけでなく家庭においても活用できるように絵や文、構成において工夫がなされている。子供は幼稚園や保育園、家庭で保育者や母親にこの絵本を読んでもらうだけではなく、自分自身で手にとって、絵を楽しみながらさまざまな事象を学習することができたと推察される。『メリーランド』は、徳本や加賀山、作家や画家が子供たちの教育と成長のために情熱と精力を注いだ保育絵本であった。

## おわりに

本稿では、保育絵本『メリーランド』創刊の背景や目的、内容や執筆者について調査をもとに明らかにすることを課題とした。徳本達雄は大学時代に幼児教育の重要性を学び、卒業後敦賀の地で幼稚園を開園した。その運営において必要となった教材づくりを自ら手がけ、『メリー



ランド』の創刊もその一環として始まった。保育者や保護者と一緒に絵本を楽しむことで子供が安定した豊かな心を持つようになることをめざし、当時最前線で活躍していた児童文学作家や童画家たちの参加を得て『メリーランド』は制作され、5年の間、幼稚園や保育園を通じて毎月子供たちに届けられた。1956年3月に廃刊となるが、その理由について『創業70周年記念誌』には、「既刊の同種の絵本に対抗する特色が十分発揮」（151）できなかったと書かれている。

「既刊の同種の絵本」は筆者の調査によると8冊刊行されており、この中で入手できた『キンダーブック』『ひかりのくに』『チャイルドブック』の1955年4月号を『メリーランド』の同年同号と比べてみると、確かに構成や内容において似通った点が見受けられる。『チャイルドブック』をのぞいて（デフォルメされた子供のイラスト）、表紙は新学期にふさわしく、満開の桜を背景にうれしそうな子供たちの絵である。内容は春の季節の自然観察、園や家庭での生活指導、童話や童謡、詩などであり、どの保育絵本もタイトル／テーマごとに見開き頁で完結する構成になっている。保育者の福地トシは保育絵本について、「一頁一頁が関連なくバラバラであるため内容の深みがなく、（子供たちの）興味の持続が少ないようです」（69-70）と述べ、内容に関しては「各社が殆ど同じような季節行事中心の企画」であると指摘している。『メリーランド』と他の3冊の保育絵本との実際の比較によると、「既刊の同種の絵本に対抗する特色が十分発揮」（151）できなかったという『創業70周年記念誌』の記述には頷けるところがある。

しかしながら、『メリーランド』の内容を詳細に分析すれば、5年間の刊行期間における変化や発展などの特徴は見えてくると思われる。また、徳本は久留島武彦の影響を受けていたようであり、彼の幼児教育の思想が『メリーランド』のテーマ選択や内容と関わっているかもしれない。これらの点は今後の課題としたい。

## 謝辞

本稿の作成にあたり、（株）ジャクエツの上田隆弘さん、小島新悟さん、早翠幼稚園の中村裕子さん、山口依里子さんから貴重な情報をいただき、大変お世話になりました。また、文献の検索・収集においては、福井県立大学附属図書館の楠井那美さんにご協力いただきました。心からお礼申し上げます。

## 注

- 1) 『キンダーブック』は1927年に日本で初めて出版された保育雑誌である。1942年には『ミクニノコドモ』に改題され、1944年には戦争激化のため休刊となった。
- 2) 『福井県統計年鑑』によると、1950年10月1日の国勢調査における敦賀市の人口総数は31,092人である。
- 3) 『福井県統計年鑑』の1912年の統計による。
- 4) 現在の（株）ジャクエツの代表取締役の徳本達郎氏は建築家の馬場正尊とのインタビューの中で、「祖父に影響を与えた人物として、……児童文学者の久留島武彦氏がいます。久留島氏は幼稚園をやっている

て、祖父が幼稚園をやりたいと思ったのも久留島氏の影響があったようです」と語っている。

<https://www.realpublicstate.jp/post/jakuets-interview1/> (2/24/2024)

5) 佐藤義美記念館の Twitter (X) の記事。 [https://twitter.com/Yoshimi\\_Museum/status/1426757177046274054](https://twitter.com/Yoshimi_Museum/status/1426757177046274054) (11/17/2023)

6) ジャクエツは昭和 30 年代に「どうわ かるた」を製作・販売しているが、絵はいわさきちひろが描いている。このかるたは数年前に、いわさきの生誕 100 周年を記念して復刻された。

## 引用文献

足立尚計『知られざる福井の先人たち』フェニックス出版、1992 年。

阿部恵『いつでもそばに 保育絵本の楽しみ』フレーベル館、2000 年。

井岡瑞日「保育絵本に対する母親の働きかけについての歴史的考察—1960 年代の『ひかりのくに』別冊付録を手がかりとして—」『子ども社会研究』27 巻、2021 年。185-205 頁。

「早翠幼稚園の発展」『大阪朝日新聞』、大正 8 年 4 月 4 日。

柴村紀代「月間絵本『こどものせかい』の研究（その 1）—杉田豊に見る『こどものせかい』の特徴」『藤女子大学紀要第 2 部』第 39 号、2002 年。67-72 頁。

『ジャクエツ 創業 70 周年記念誌「幼な子と共に」』若越、1985 年。

『ジャクエツ 創業 100 周年記念誌』ジャクエツ、2015 年。

上笙一郎『日本の童画家たち』くもん出版、1994 年。

谷脇由季子「大正自由教育における幼稚園教育に関する一考察：成城幼稚園の創設とその位置付け」『成城大学共通教育論集』第 7 号、2014 年、1-22 頁。

永田桂子『絵本観・玩具観の変遷』あすなろ書房、1987 年。

『福井県統計年鑑デジタルアーカイブ』

<https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/toukeijouhou/toukeinenkan.html> (3/24-30/2024)

福地トシ「子どもの成長に沿った企画性を」『日本児童文学』第 5 巻、第 10 号、1959 年。69-71 頁。

別冊太陽『ちひろメモリアル 生誕 100 年』平凡社、2018 年。

松山鮎子「幼年絵雑誌の『地域性』に関する歴史的考察—月刊絵雑誌『チャイルドブック』を事例として」『学術研究（人文科学・社会科学編）』第 61 号、2013 年。71-90 頁。 <https://waseda.repo.nii.ac.jp/records/11281/export/bibtex> (11/24/2024)

宮下美砂子「『月刊保育絵本』にみるいわさきちひろの母子像の変遷—1950 年代末から 1970 年代前半における」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』294 巻、2015 年、64-176 頁。

文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに、1979 年。